

F-7 日本語のラレル構文と中国語の“被”構文の対照言語学的研究

—意味領域の共通性—

劉嘉勇 (名古屋大学大学院)

ryukayu1995@yahoo.co.jp

要旨

本研究は日本語のラレル構文と中国語の“被”構文の意味領域における共通性を考察した。ラレル構文には「受身」「可能」「自発」「尊敬」といった4つの用法があるが、これまでの日中対照研究は、“被”構文とラレル構文の受身用法との対照に議論が集中している。本研究は、“被”構文をラレル構文の受身以外の用法も含めた全用法と対照し、中国語の“被”構文と日本語のラレル構文は受身の領域だけでなく、可能と自発の領域でも部分的に共通していることを明らかにした。中国語の“被”構文も日本語のラレル構文も動作主の意図通りに行為が実現したと動作主の意図と関係なく行為が実現したことを表すことができる。これは、両構文がともに他動的事態の正反対に位置する構文であることに起因すると考えられる。

1. はじめに

中国語の“被”構文は多くの場合、日本語の受身文に訳されるため、これまでの日中対照研究においては、“被”構文はほぼ日本語の受身文に相当すると考えられてきた。しかし、中国語の“被”構文は必ずしも日本語の受身文のみに対応するとは限らない。例えば、珍しい食べ物を偶然食べたという事象を言語化する際、中国語では“被”構文を選択することが多い。

(1) “今天中午吃饺子啦然后…包着钱的和包着糖的两种不同的饺子都被我吃到了¹⁾。” (BCC 语料库)

「今日のお昼はギョーザだった。*コインが入ったギョーザと砂糖が入ったギョーザが私によって全部食べられた」 (注:中国では、ギョーザを食べる時、コインと砂糖が入ったギョーザに当たると、幸運だと言われている)

従来の研究では、例(1)のような一人称動作主の受身文は日本語には存在しないと見なされていた。それは“被”構文が受身の意味のみを表す構文だという発想が強固にあったからだと考えられる。しかしながら、日本語のラレル構文でも、例(1)のような事態が表現されることがある。

(2) (私には) 珍しいギョーザが食べられた。

ただし、この場合のラレル構文はもはや受身の領域ではなく、実現系可能の領域である。実現系可能は好ましい事態の偶然の発生という意味を表すことがある (林青樺 2007 等)。このように、“被”

1) 中国語の例文と日本語訳との対応を見やすくするために、本研究では、主語、行為者、述語部分のように、枠囲い、網掛け、下線を施して表示する。

構文が日本語のラレル構文の可能用法と対応関係を持つという点は従来の研究では指摘されていない。

そのほか、中国語の“被”構文は事態が動作主の意図と関係なくコントロールできずに実現した場合にも用いられる。

(3) 一不注意，鱼被我烤焦了。*うっかりして、鱼は私によって焦がされた。

この文は、動作主が魚を焦がすことをコントロールできるにも関わらず、動作主の意図と関係なく魚を焦がすという行為が実現したことを表している。一方、日本語のラレル構文も動作主の意志がないにも関わらずある行為が実現したという意味を表せる。この意味のラレル構文は日本語学では、「自発」と呼ばれる。

このように、中国語の“被”構文と日本語のラレル構文は受身の領域だけでなく、可能と自発の領域にも共通性が見られる。本研究は中国語の“被”構文と日本語のラレル構文の共通性を明らかにしたうえで、両構文にこのような共通性が存在する原因を考えて行きたい。

2. 先行研究

2.1 中国語の“被”構文

杉村(1998、2016)は動作主の人称に注目し、中国語においては一人称動作主の“被”構文が存在するのに対し、日本語においては一人称動作主の受身文が成立しにくいと指摘している。

(4) 网红面包，今天终于被我买到了。*超話題のパンは今日、やっと私によって買われた。

(5) 这道题终于被我解出来了。*この問題はやっと私によって解かれた。

(6) 电脑被我弄坏了。*パソコンは私によって壊された。

(7) 机会被我白白错过了。*チャンスは見す見す私によって見逃された。

杉村(1998、2016)は、(4)(5)のような“被”構文が“自我表扬”(自己賞賛)、(6)(7)のような“被”構文が“自我责备”(自己非難)を表すと指摘している。杉村(2016)は、日本語で一人称動作主の受身文が成立しにくいことが“話題性等級”(Topicality Hierarchy)の制約によるものだと指摘している。中国語においては“話題性等級”の制約が相対的に弱いため、一人称も“被”構文の動作主になり得るのに対し、日本語においては“話題性等級”の制約が強いため、一人称が受身文の動作主になりにくい(杉村 2016: 1-3)。この“話題性等級”とは簡単に言えば、名詞句が主語になるときの優先順位である。

(8) 一人称・二人称代名詞 > 三人称代名詞 > 専有名詞 > 普通の人名詞 > 有情名詞 > 非情名詞

(杉村 2016: 2 筆者訳)

この優先順位は、上位にあるものは下位にあるものより主語になりやすいということ意味する。一人称・二人称代名詞は最も上位にあるため、文の主語になるのが普通である。ただし、杉村(1998、2016)では、上述した一人称動作主の“被”構文が日本語でどのように表現すべきなのか

については深く言及されていない。

2.2 日本語のラレル構文

日本語のラレル構文には受身用法以外に、可能用法、自発用法、尊敬用法もあることが知られている。そのうち、受身用法は使用範囲が最も広く、定義しにくい。志波（2015）では現代日本語の受身文の様々なタイプが議論されているが、中国語の”被”構文はその中の多くの受身文タイプに対応している。そのため、先行研究では、日本語の受身文と中国語の“被”構文の対照に重点が置かれてきた。

可能用法は大きく「潜在系可能」と「実現系可能」の2つのタイプに分けられる（渋谷 1993）。実現系可能は事態が動作主の意図・期待通りに実現したことを表す。現代日本語では、ラレル文が可能を表すのは一段動詞と動詞「来る」の場合に限られ、五段動詞には「-e-」という接辞が用いられる。このように、現代日本語では同じ「可能」の意味が動詞の活用タイプによって異なる形式で表されているが、古代日本語では、ラレル文の可能用法はすべての動詞に適用された。そのため、本研究は現代語の「五段動詞+e-」の活用形も便宜的にラレル文の一種と見なして議論を進める。

自発用法は、動作主が本来はコントロールできるはずの事態が、動作主の意図と関係なくコントロールできずに実現することを表す。現代日本語では、自発は一部の知覚・感情・認識動詞等に使用が限られている（「思い出される」等）が、古代日本語では、動作動詞による自発文も存在した（川村 2012、志波 2022 等）。

3. 考察

本研究は北京大学中国語言語コーパス（CCL）と北京語言大学現代漢語コーパス（BCC）と“百度”（BAIDU）検索と“知乎”（ZHIHU）検索からジャンル別で“被”構文を 1500 例、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）からジャンル別でラレル構文を 1500 例抽出した。用例を分析することを通し、中国語の“被”構文と日本語のラレル構文に以下のような共通点と相違点があることを明らかにした。

3.1 “被”構文とラレル構文の受身用法の対照

志波（2015）によると、現代日本語の受身文は被害、受益、事態の実現、事物の存在、事物に関する社会的認識・呼称、事物の性質、事物の関係、現象などの意味を表すことができる。一方、中国語の“被”構文は被害、受益、事態の実現、物事に関する社会的認識・呼称、物事の関係、現象の意味を表すことができるが、物事の存在と物事の性質を表すことはできない。

被害を表す“被”構文とラレル構文

(9) 小张被母亲骂哭了。張は母に叱られて泣いている。

受益を表す“被”構文とラレル構文

(10) 我被老师表扬了。私は先生に褒められた。

事態の実現を表す“被”構文とラレル構文

(11) 几年下来，一本本工具书甚至被磨得毛了边。（《青年文摘》2003 人物版）

数年間経って、一冊一冊の本は既に磨り減らされてボロボロになった。

中国語の“被”構文も事態の実現を表すことができるが、日本語ほど用いられない。例えば、日本語では、「机が外に運ばれた」のように無対他動詞のラレル形で対応する自動詞的用法を補う場合にもラレル構文を使う。それに対し、中国語では、多くの動詞は自他両用で、そのまま自動詞としても他動詞としても使うことが可能であるため、受動化を通して自動詞的用法を補う必要がない。物が何らかの動作を被った後の状態変化に焦点を当てるために、事態実現の“被”構文が用いられる。

事物に関する社会的認識・呼称を表す“被”構文とラレル構文

(12) 茜草有抗癌的作用，却被人们用来做染料。（百度）

茜草には抗癌の働きがあるが、皆に染料として使われる。

事物の関係を表す“被”構文とラレル構文

(13) “文革”时，监狱虽然被高墙围着，但并不能隔断与那混乱社会的悄然联系。（CCL《绿月亮》彭荆风）「文化大革命」の時、監獄は高い壁に囲まれていたが、混乱した社会から切り離されていたわけではない。

現象を描写する“被”構文とラレル構文

(14) 水面が陽に照らされてきらきらしている。

水面被太阳一照，闪闪发光。

そして、事物の存在を表すラレル構文は中国語では“被”構文では表されず、存現文で表される。中国語の存現文は事物の出現、存在と消失を表す専用の文型であり、「場所＋出現/存在/消失V＋主体」という構文形式で表される。

事物の存在を表すラレル構文

(15) 部屋に花が飾られている。

房间里装饰着许多花。（存現文）

ちなみに、例(15)もラレル形で無対他動詞の自動詞的用法を補う例である。「机が外に運ばれた」の例と同様に、中国語では受動文にする必要がない。

事物の性質を表すラレル構文は中国語では能動文で表される。

(16) この箱は中が仕切られている。

这个箱子里边是隔开的。

志波（2015）によると、日本語では、当該の意味を表す形容詞がない場合は、例(16)のように動詞のラレル形を形容詞として使われることもある。一方、中国語では、品詞の区分が曖昧であるため、動詞を形容詞として使いたい場合は“是…（動詞）…的”という文型で表現される。

3.2 “被”構文とラレル構文の可能用法の対照

ラレル構文の可能用法には潜在系可能と実現系可能という2つのタイプがある。

(17) このキノコは食べられる。(潜在系可能)

(18) この難題がやっと解けた。(実現系可能)

そのうち、中国語の“被”構文と共通性を持つのは実現系可能である。実現系可能は「意図成就」(尾上 1998)とも呼ばれ、事態が動作主の意図・期待通りに実現したことを表す。一方、中国語でも、事態が動作主の意図・期待通りに実現した場合は、“被”構文で表現されることが多い。

(19) 这道难题终于被我解出来了。

*この難題はやっと私によって解かれた。

(20) 网红面包，今天终于被我买到了。(百度)

*超話題のパンは今日、やっと私によって買われた。

(21) BOSS终于被我打败了。(百度)

*BOSSはやっと私に倒された。

例(19)～(21)のような“被”構文の表す事態は2つの特徴を持つ。1つ目は、述語の表す事態が望ましい事態であるということである。この点は“终于”(やっと)のような副詞表現と共起することが多いということから窺える。2つ目としては、述語の表す事態が実現しにくい事態であるということである。「難題を解く」と「超話題のパンを手に入れる」と「BOSSを倒す」ことはいずれも実現が難しい事態である。一方、日本語の実現系可能も実現しにくく、望ましい事態の実現を表す。

(22) 私はやっと会社の外国人の同僚の名前が覚えられた。

(23) 入幕したばかりの新人力士は横綱朝青龍に勝てた。(林青樺 2007: 40)

「外国人の名前を覚える」と「横綱に勝つ」ことはいずれも動作主にとって望ましく、実現しにくいことだと考えられる。つまり、中国語の“被”構文と日本語のラレル構文の実現系可能はともに実現しにくい事態が動作主の意図・期待通りに実現したことを表すことができるのである。中国語の“被”構文と日本語のラレル構文の実現系可能の対応関係を直観的に示す例は次の例である。

(24) “今天中午吃饺子啦然后…包着钱的和包着糖的两种不同的饺子都被我吃到了。”(BCC 语料库)

「今日のお昼はギョーザだった。*コインが入ったギョーザと砂糖が入ったギョーザが私によって全部食べられた」(注:中国では、ギョーザを食べる時、コインと砂糖が入ったギョーザに当たると、幸運だと言われている) (例(1)再掲)

これまでの研究では、例(24)の“被”構文と対応するのは日本語の受身文であると考えられていた。しかし、日本語の受身文には“話題性等級”(Topicality Hierarchy)の制約が存在するため、受身文としては成立しない。よって、この種の“被”構文は中国語特有のものだという結論しか出されなかった。確かに、例(24)は日本語の受身で述べると不自然である。しかし、動作主「私」を主語に立てたラレ

ル構文であれば日本語としても自然になる。

(25)a. *珍しいギョーザが私に食べられた。

b. 私には珍しいギョーザが食べられた。

例(25b)は実現系可能構文である。実現系可能構文においては、動作主「私」が主語（大主語）であるため、“話題性等級”の制約の問題が取り消される。一方、この意味を表す中国語の“被”構文は動作主が1・2人称であることが多く、主語が動作を被るという意味よりも、動作主の動作の実現に焦点が当たっている。動作主が1・2人称であるということは、むしろ動作主に焦点を当てて事態を述べているのだと考えられる。つまり、実現しにくい事態が動作主の意図・期待通りに実現したことを表すことは“被”構文とラレル構文の実現系可能の意味的な共通点であると言える。この意味を表す構造形式として、動作主が1人称であることが多いことに加え、両構文とも反他動ともいべきマーカーを用いて、さらに動作主を通常の主語（主格）から降格させているという構造的共通点がある。こうした構造形式が、通常他動詞文とは異なる事態が動作主の意図・期待通りに実現したという意味を表すことになるわけである。

3.3 “被”構文とラレル構文の自発用法の対照

ラレル構文の自発用法は動作主が本来であれば当該行為をコントロールできるはずであるにも関わらず、動作主の意図と関係なく行為が実現することを表す。

(26) しかし今になっても、靴を縫った母の手が鮮明に思い出される。（BCCWJ『タケノコ大臣奮戦記』坂口力(著)）

(27) 【相手の好意の深さが押し量れて、】かつ使ひつるだにあかずおぼゆる扇もうち置かれぬれ。

（枕草子・いみじう暑き昼中に）〔（氷を持つ一方）使っていてさえ物足りなく感じられる扇も、思わずそばに置いてしまうのだ〕（志波 2022a: 319）

(28) 格子押し上げ、妻戸ある所は、やがてもろともに率て行きて、昼のほどのおぼつかなからむ事なども言ひ出でにすべり出でなむは、見送られて名残もをかしかりなむ。（枕草子・暁に帰らむ人は）（志波 2022b）

例(27)(28)では、「扇を置く」と「見送る」はいずれも本来であれば動作主がコントロールできる行為であるが、動作主の意図と関係なく「扇を置く」と「見送る」という行為が実現したことを表している。一方、中国語の“被”構文も動作主の意図と関係なく行為が実現したことを表すことができる。

(29) 为什么方便面会被我煮得这么难吃？（知乎）

*どうしてインスタントラーメンが私によってこんなにまずく調理されたんだ？

(30) 机会被我白白错过了。

*チャンスはみすみす私によって見逃された。

例(29)(30)は、動作主が「インスタントラーメンをまずく調理する」と「チャンスを見逃す」という事態の発生を回避できるにも関わらず、動作主の意図と関係なく事態が実現したことを表している。中国語の“被”構文と日本語のラレル構文の自発用法はともに動作主の意図と関係なく事態が実現したことを表すことができると言える。

このように、中国語の“被”構文と日本語のラレル構文は受身の領域だけでなく、可能と自発の領域でも部分的に共通している。“被”構文とラレル構文がこのような共通性を持つことはラレル文と“被”構文がともに他動的事態の正反対に位置するような構文であることに起因すると考えられる。他動詞文は、主語（動作主）が意志でコントロールした動作プロセスに焦点が当たっているのに対し、“被”構文とラレル構文は動作主の意志とコントロールによる動作プロセスには注目せず、主語（対象）の変化という実現の方に焦点が当たっている。

4. おわりに

本研究は構文的特徴と意味の対応関係に注目し、中国語の“被”構文と日本語のラレル構文を対照した。“被”構文とラレル構文は受身の領域だけでなく、可能と自発の領域でも部分的に共通しているということが明らかになった。“被”構文とラレル構文がこのような共通性を持つことは、両構文がともに他動的事態の正反対に位置する構文であることに起因すると考えられる。

参考文献

- 尾上圭介（1998）「文法を考える6 出来文(2)」『日本語学』17-10
- 川村大（2012）『ラル形述語文の研究』くろしお出版
- 志波彩子（2015）『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』和泉書院
- 志波彩子（2022a）「自動詞・受身・可能・自発—自動詞的表現のパラディグマティックな体系—」『論究日本近代語2』
- 志波彩子（2022b）「4. 動詞のヴォイスに魅せられて：自発（古代日本語も含めて）」『リベラルアーツ検定クイズ』
- 渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1
- 林青樺（2007）「現代日本語における実現可能文の意味機能—無標の動詞文との対比を通して—」『日本語の研究』3-2
- 杉村博文（1998）〈论现代汉语表“难以实现”的被动句〉《世界汉语教学》第4期，57-64
- 杉村博文（2016）〈汉语第一人称施事被动句的类型学意义〉《世界汉语教学》第1期，1-11